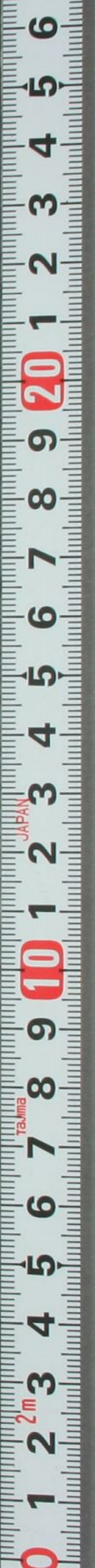


和装本

千 13  
3832





413  
3832

門 子 13  
虎 3832  
巻

三テ人数ノ多ク積ル備ラ立間敷ノ場ツモリ  
是等ヲ第一ト云ニ山川地理ノ案内諸事ノ切  
者寒暑ニ身ヲ子リ勞苦堪ルハ知行所ニ任  
居スレハ自ラナル也

昭和十一年  
二月二十四日  
八景

11-2-24





阪東三津五郎

秋野伊三郎



阪東三津五郎

小佐川常世

阪東大六













常盤津小亭

市川物代



市川  
八百藏  
知速

萩野伊三郎事  
初朝















不動堂



夜雨菴



夏目三郎





其二

中村傳九郎

秀文



○坂東三津五

秀佳入江戸名明の寄て

譽詞のほらね

山東庵京山歌

東西くあはらくく京橋中橋あやまたぐら秀  
佳さんさわゆそふ。そもを川春の吉例ハ曾我ゆ  
うごうぬ祐つねどのひるたの幕張横小引く霞が関  
の間くら見上る富士の大さそもの人の山なま大入ぬ  
日まぬさしをひそかりぬ。日れもくと江戸見阪か  
箱の十郎祐成かぬまの露もつ御殿山花さうきり  
たのぬの見呀いさすの芝浦の濱とらりり神が浦  
千鳥が淵の汐汲いあぐめツ貝かたごらても。オヨ大か

極上の位山ぬるびの冠よりさくく。歌  
さまびそういやさだえ来藝ハ強弓なれば見物の的を  
ねらひぬ人のころぞく

○市川惣代

功成る名とげて身退くく人の古人のせうふ右と左の花  
紅葉よ立まぶくさる舞臺の見事さ見物あつとらん  
あんまり古々の江戸へ錦糸くさりー四ツ紅葉のト葉  
散るハさむぐさらの立田憎らーの無常の風さ  
江戸ハゆきり二の津へも其頃るさこの雨をふらせり  
されども常盤津の老松枝葉茂つてくひり  
さむが千と勢を契るめをさる一葉の紅葉ハ仕











顔と見せざるゆゑ。今の娘連中、ちかむるべし。たゞを木の  
花を胡蝶かまゝのうらなひのあり。ある人のこゝろ。

玉と見る顔ゆてと葉の寒菊や

沢村 ちかむるぬれのまきもの

○中村歌右衛門

木村

大阪八幡筋三休橋のりやう。加賀屋橋之助がうき屋の庭の

梅王當時のといふ名木あり。花はねら梅當時ののごとく枝ぶりの

鶴の舞ふ似たり。古人仙女此花を愛して。江戸へとつとせ

あゆ其花切幕とまもぬひらけが見物あつと感下花の

うりやとるんやくとほひのまきの声がかゝるふつれてまき

大木をまう。衆芳是ゆあふんとくと見物山をるぬ加古

川本草ふくすき人。是と見て曰此梅王といふ名木と

漢名を揺錢樹といひ。俗ゆい金の生る木の事なり。蠻名

をソロバンといひ。一名をらんろう木といひ。金の生る木と云れ

たるなり。ソロバンといひ。眼玉とよむる見物が声とけつるの

名なり。一名をらんろう木といひ。古今三木の傳ゆひと

あき秘説るまは傳えがごとと奥歯の物とのこととま

けまは。氣ゆくつてごのもるまはらんろう木といひ。らん

であらうと本草ハのまう。花鏡群芳譜を尋ても見

えむ。見一ひせうゆさせども書物ゆえを五三加手の名

僧しらぬたぐねてもあつとまは。とツ三加下三ハ

なり。一三が三年うらと一九う苦勞して加賀屋の庭王樹を



だんろう木とりりのしきと伝存を十一万三千四百五十六八は  
たぐねくまども。ある人一人も。あまの退屈してまう  
と目睡し。夢の笠箱とり。唐士の狂言作者のくられ  
ゆめ京山本のそく。まとも書もの。加賀屋の梅玉樹と  
だんろう木と称すること。その訳をあらぬとのめいよくの  
ゆめくらふひんの夏るれば。そまのり。そまのり。だん  
ろう木と。だんハ甚とりの文字。うら好と書く。木ハ氣  
ぎの氣氣てんの氣ゆも。そらくるり。見物の甚と好  
氣とり。そまよくのそまが。そま。則名人。中村歌麿の  
ハ何れ。そま。大入の山花を咲せる金のるる木。るるるる

う右衛門。あるまこと。神ハあがせぬひり。こま。だんろう  
木のしき。まらりと。まら。甚と好。氣とり。と。豊役者  
のまら。んや。作者のうらぬも。あのこと。あの人。まら。ね筆  
るま。まら。仕掛も。ぐ。そ。する。うら。樂屋。板元。か  
のそ。あ。せの拍子木。せ。も。口。で。まら。め。發光の  
幕。あ。け。る。ん。

○市川團藏

美少年の頃。江戸。あ。立。の。茶の花。と。め。た。や。の  
上。が。え。の。あ。ま。ら。の。ら。赤紙。付。の。枚通。封。入。の。番。附  
その名を。みる。ま。り。の。ま。て。當時。の。ま。の。の。ま。の。こ。う。の。ま。  
へも。響。た。こ。ま。ら。こ。こ。八文。舎。の。評。説。と。ん。の。



目と縁りはりの江戸で初めとぎせの母にわらわ  
うけりしと待ちあり

誹名の紅々日の出乃色をそそて

江戸の深下地りも

鑑

名人藤間が仕込る舞ぶりの足まき大鳥をこと大目

幼稚の頃より才語ありて踊り誓古の乱拍子もこと

踏バあそこと悟りりりも精を出しおしも蛇をばり

さるとしハ才龍雲と望むの志もやまごをくら山まさら

さるとし項文化十三子のと四月初と浪花のり中

村歌右衛門算子とるり名と中村鶴助とわらわら

名人藤間が仕込る舞ぶりの足まき大鳥をこと大目

玉がゆらんごる師匠の目鏡みちひるくは鶴年と小羽を

のしと文政八年酉の顔見勢より芝翫といひ名物の名を

しらひていよく評判よりの田原いよく興言る人多く

いよみ因之いの字と四ツイ菱の替紋浪花小流行せ人の

四イ半柄のりさまはを此顔見勢ハ江戸の切幕を

状使ト声とけさせ十二年ぶりて古郷へ錦後と飾

る太鼓謡ひの長上下勘十郎も黄るる泉中目利の鼻

を高くすべし元來江戸ツ子なまはハ江戸氣ハ百もせり

ちの助藝の力ハ強弓のつる助芝翫三十三軒堂とても

わらわら



○中村松江

三々の津へ千とせの色とあらせし中村の名木松江  
大當時の正且るまは藝評ハりつとごり舞臺の  
外は連誹を嗜み画もあり茶もあり花もあり糸竹の  
妙手あり人々普く人の匠ぞんしり。りつとや江戸の  
頃ハ文墨をりく都下の文場ハ交を予もあつとごり  
きあの時予が友人前の豊國が年奠を画し扇の讀を  
たけま三光とぞと敢ぞ

梅の自画讀小

春の夜や頭巾にすれて梅の花

汲 鮎 小 たる 句 ハ 水 の 色

弥生の末つとちちりぐまことあるとく花とつねてよめ

由く春をあらしとめくくまう

ひ せ 花 や の 花 と 見る か 角

より原とせのる家乃姪女とんごくとんけを

傾 城 の 艶 なる ハ け 接 ぐ ち

こまの其角が句と真とる

醉 吟 たり

とまらハ皆即真るまは梓木の千とまのあつねども  
今もひりどせしとまあるせり猶あるべけとごり  
記さ

○中村傳九郎



朝比奈の樂入り暑く其角が時の傳  
郎どめり累世名人の家号ひまーくら匠藝の達  
者るる夏ゆきも舌と巻るる。紋野の鶴千年  
の樽と祝す。家の宝の金の糸幣ハ日本一の太夫  
えたるを

世の響音く樽太鼓の傳九郎

るん幾代もあはれくべ

○市川團十郎の題を

木場樂のつらね

當時るんでもごうて死繁昌時發行天智天皇乃  
ひりより古今稀る俳優の親王七代目玉遠らん

のハ八幡鐘の音ゆも聞け近くハ寄る目ふもみうの  
深川船ねんとやハ洲崎の辨賊天兄ぶえハ惠比壽の  
宮祖父似下戸仲間多田のまんぢうの身うちふ  
おのくそをかせがあそこと悟る智仁勇木場いお家の荒  
夏獅子は牡丹のてふあのもニッるる。男子の花大  
鵬のあひ藏ハ古今才智る童子宝童子日々くハ新  
新之助ハ歳より余程せのう童子是を左右の前立  
ゆ成田加護の太郎當といふこんをく若衆當年つも  
つく八百番の合せ誹諧狂歌ハ代々めぐり葉点取  
るハハりでも栗詐トやごごらねるん。学びの  
窓とおひりうき向を佐と見渡せば金掛鉢植



殿原赤い草の野暮椿古池の鏡の蒲葎  
 鱧とあまひく。そのてへ来の弓取が白眼  
 通一矢のあま。ゆく大太刀八家重代の金槍一陽来  
 復の切幕あら。初音の声とりけ烏帽子柿の葉  
 鶴びの鶴九皋あるり田屋ハ天小聞ゆ大立もの  
 京橋の野暮鶯がホ敬て白ま。



